トワイライト世代 その６

安達 真魚

データセンター（印西市大塚、北環状線）

柏ジュンク堂閉店

その日昼食後、いつものように柏のショッピングビル「モディ」の階段を利用して、５Ｆまで登り、ジュンク堂書店に入ろうとしたところ、シャッターが閉まっていた。

「ジュンク堂書店 柏モディ店 閉店のお知らせ 営業終了日／２０２４年９月８日（日）」

とのお知らせが貼ってあった。

その日の前日に閉店したことがわかった。予告などは認知していなかったので、残念な気持ちと驚きで、次の行動に移ることができず、お知らせの前にしばらく立ち止まってしまった。

お知らせに書かれていたことだが、柏ジュンク堂は、２０１６年１０月から柏モディ店内店舗として８年間営業を続けてきたらしい。正式には、丸善柏ジュンク堂書店で、丸善の系列のようだ。系列店舗のジュンク堂書店池袋本店・南船橋店、丸善丸の内本店・日本橋店・津田沼店は、いずれも大型店だ。柏店も蔵書は５０万冊く

らいの比較的大型店舗であった。この近くには、これだけの規模の店舗はない。

その後、ネット上には、柏ジュンク堂の閉店を惜しむ多くの記事が掲載されていた。やはり、この書店の閉店を残念だと思っている人が多いと感じた。

書店閉店後のこのフロアには、アニメ、コミック、ゲームの専門店「アニメイト」の他に、アニメ、ゲーム、ＶＴｕｂｅｒグッズのショップ、カプセルトイ専門店が出店している。さらに、トレカショップ、デンタルクリニックなどがオープン予定だ。柏モディの客層は比較的若年層が多いため、運営する丸井グループは、カルチャー発信拠点として、関連の店舗を充実させていくようだ。自分の年代にはあまりなじみのないショップが多く、時代の変化を、少なからず感じてしまう。

以前、柏駅の近くには、大きな書店として柏ステーションモールのWING BOOK CENTERやスカイプラザ柏の浅野書店があったが、現在はなくなっている。今は、柏ステーションモールのくまざわ書店と二番街カルチェ５のＴＵＴＡＹＡくらいだが、いずれも蔵書数は少なく、大型書店ではない。

柏駅周辺では大型書店はなくなったが、都内などには、まだまだ大型書店は健在だ。前述の丸善系列の大型書店に加えて、八重洲ブックセンター、神保町の三省堂書店など、探せばまだまだありそうだ。

最近、ＴＵＴＡＹＡ（蔦屋書店）の新規出店が著しい。本が読めるカフェが併設され、本以外の物品の販売もある斬新なスタイルの書店になっている。近場では、イオンモール幕張新都心、柏の葉T-ＳＩＴＥ、印西牧の原ビックホップはこのスタイルである。ＴＵＴＡＹＡではないが、イオンユーカリが丘の未来屋書店もブックカフェ併設の書店だ。さらに、スターバックスコーヒー（スタバ）が併設されているＴＵＴＡＹＡがあって、これを「ツタバ」と呼ぶらしい。

昔は、秋葉原電気街のついでなどに神保町の書店街にも、たまに出かけたものである。この閉店をきっかけに、

改めて書店利用のスタンスを考えてみようと思う。ブックカフェの積極利用もいいかもしれない。

データセンター

印西市小倉台という地区に住んで、約30年になる。学校、公園、図書館、病院、コンビニといった施設を除くと全部が住宅地で、その住宅のすべてが集合住宅（マンション）の地区だ。Google マップで測ると、周囲約2.4km、面積が約32ｈａで、東京ドームの約6.8倍になる。自宅の周囲を散歩することが多いが、地区内だけでも相当な距離を歩くことができる。

この小倉台地区から、北東に向けて、大塚、泉野、泉、鹿黒南と地区が続く。泉地区は、旧木下街道の道筋が残る昔ながらの一次産業を主体とした集落だ。泉地区を除いた大塚、泉野、鹿黒南の３地区には、当初の千葉ニュータウンの開発以降に建設された大きな建物が多い。用途は、およそ事務所、物流センター、商業ビル、データセンターに分けられるようだ。この数年では、とくに鹿黒南地区での、物流センターとデータセンターの建設が顕著だったと感じている。２０２３年４月、Google の日本初のデータセンターが印西市に開設されて注目を浴びたが、建設場所は、鹿黒南地区である。そのデータセンターは、一目で Google とわかるように、ビルが彩色されている。できた当初の頃、いわゆる「Google 参り」に来て、写真を撮影している人も、たまに見かけたものだ。とにかく、鹿黒南地区はデータセンターが多いという認識があった。

データセンターのビルは、それがデータセンターだとわからないようにするためなのか、表札や看板に告知することは少ない。積極的にわかりにくくしているようだ。鹿黒南地区の Google ビルは例外だと思う。データセンターは、窓が小さく、物流センターのようにとぐろを巻いたアクセス路がないので、見た目でなんとなく、データセンターだとわかる。

大塚地区のビジネス街も、たまに散歩する。この街区

は、もともと北総鉄道の客数をアップさせる発想で、都心などから通勤客を呼ぼうとして建設されている。アルカサールの居酒屋は、通勤客の受け皿の一つになっている。従って、ビルは通常のビジネスビルであるが、当初からデータセンター的に使用することも意図されていたかもしれない。このビジネス街を散歩していて、最近気づいたことは、この街区にちょっとした建設ラッシュが起きていたことだった。街区には、まだ土地に余裕があったのだろう。建設されていたのは、データセンターであった。散歩の途中なので、正確に数えているわけではないが、１０棟くらいはあったよう思う。それを裏付けるように、ビジネス街に接する県道の北環状線では、相当長い間、道路での電気工事が行われていた。工事の表示板をよく見ると、工事の主体は、東電パワーグリッドと表示されていた。このことは、この街区の新棟のビルは、データセンターが多いことを裏付けているように思う。

日本の公式なデータセンターの数であるが、２０２５年２月現在、日本データセンター協会（ＪＤＣＣ）のデータセンター一覧によれば、２４７か所のデータセンターがあげられている。一覧の内容はよくわからないが、そのうち、千葉県は１３か所で、県の中では、印西市が１０か所、残りは、白井市１か所とその他である。

印西市にデータセンターの設置が多い理由は、意外とわかりやすい。

・自然災害のリスクが小さい。下総台地上なので、地盤が良く地震に強い。加えて、水害も発生しにくい。
・安定した電力供給ができる。
・敷地として利用する広い土地があった。
・国道４６４号線が近くで、交通の便が良い。首都圏からも、成田空港からもアクセスしやすい。
・データセンターで働く人を得やすい

上記のうち、印西市の場合、自然災害のリスクが小さいことと安定した電力供給できることが、とくに注目されている。

データセンターは、莫大な電力を消費する。安定した電力供給がなければ、立地できない。市内では、長い期

間、そのための電気工事が行われている。一番目立ったのは、国道４６４号線沿いの草深地区のパークゴルフ場の隣接箇所と印旛明誠高校グランドの隣接箇所だ。工事の表示板には、「電線を通すトンネルを作っています」と表示されていた。この国道沿いには、電気を通すための地下トンネルが、シールド工事によって設置されていて、この２か所は、その作業口だったことがわかる。地下トンネルということは、相当な電力供給に対応できると想像できる。

データセンターとは直接関係ないことではあるが、前述の大塚地区の電気工事と同様、電力供給を地下で対応してしまうことは、とても好ましいことだと思う。コストは大きくなっても、景観上、防災上などを考えれば、これからも積極的に採用されることを期待したい。このパークゴルフ場周辺は、送電線が目立つところであるので、余計にそのように感じてしまう。

多くのデータセンターが近くに建設されたところで、日常生活が何か変わるということではない。先端技術の一端を目の当たりにしていることだけで十分である。これからも、データセンターがどんどん増えていくトレンドは、しばらく変わらないだろう。

と、ここまで書いた時点で、さらに身近で重大な情報を入手した。千葉ニュータウン中央駅の北側のイオンの東側の駐車場敷地に、６階建てのデータセンターが計画されているとのことだった。２０２５年４月下旬には、近隣の住人に対して、図入りのお知らせ文が配布された。ネット上には、「駅前の一等地にデータセンター計画、『人が入れない施設が建っていいのか』と反対の声相次ぐ」の記事が発表された。さらに、その記事に対応する数多くの意見が寄せられた。これまで、市内の他のデータセンターは、このように駅に近いケースはない。今回のデータセンターの立地については、法律的には問題ないらしい。

しかし、印西市や地元住民などは、現在駐車場であるこの土地の周辺には、公益性の高い施設か、マンションのような住居が建設されることを思い描いていたように思う。データセンター建設は、広く考えれば公益性が

高く、他の建物より市の税金が増える可能性もある。ただ、データセンターがその場所に建設された場合、印西市や地元住民などからすれば、それは公益性の低い閉ざされた建物であり、街の発展志向という視点では歓迎されるものではない。データセンター建設側も、地元側もそれぞれの主張があり難しい問題だ。今後を注視したい。

デジタル技術と経済力

２０２５年1月にトランプ氏が大統領に返り咲いて以来、世界はトランプ大統領の言動に振り回されている。関税の引き上げ、パナマ運河の返還、グリーンランドの領土的野心、ウクライナ戦争、ガザ問題、パリ協定離脱など、繰り出す政策は多岐にわたる。アメリカの国益のためであれば、彼が標榜するアメリカ第一主義に基づいて強引に実現しようとしているが、背景には、世界一の軍事力と好調が続く経済力がある。

アメリカのＧＤＰは、世界中の他国を圧倒しており、世界一の経済大国である。多くの要素が、大規模な経済を支えている。例えば、資源の豊富さ、地理的条件、技術革新への投資、人口と労働市場の拡大、金融市場の整備、資本調達の容易さ、政策とインフラ整備、教育、研究開発、消費活動など、多くの点で高水準な状況だ。これらのなかで、とくに注目されるのは、技術革新の一つであるデジタル技術である。アメリカの経済が好調なのは、アメリカ発のデジタル技術ではないかと、最近になって改めて気がついてきた。さらに、機械、電気、化学、土木、建築、電子、情報など、他の分野のどれをとっても、科学技術の枠組みは、アメリカ発が多いのではないかと思う。

デジタル技術について、身近に扱える機器であるＰＣとスマホで考えてみたい。

１９９５年にマイクロソフトが発売したWindows95は、マルチタスクとグラフィカルユーザインターフェース(GUI)を採用した画期的なＯＳ（基本ソフトウェア、オペレーティングシステム）だった。マイクロソフトがＰＣ

のソフトウェアでの優位性を決定づけるきっかけとなった。デジタル関連の技術は、一旦普及すると、継続して使用されるようになる性質を持っている。いわゆるデファクトスタンダードである。Ｌｉｎｕｘ系のＯＳやＭａｃのＭａｃＯＳも同様である。Ｌｉｎｕｘ系のＯＳは、インターネットのサーバーＯＳとして使用されることが多く、Ｍａｃは、ｉＰａｄを含め、アートや音楽などクリエータ系の用途に定着している。

スマホの世界では、ｉＰｈｏｎｅの登場がデジタル技術の進歩に大きな影響を与えた。ｉＰｈｏｎｅは年ごとに進化し、「ポケットコンピューター」に変化していった。重要なのは「App Store」の存在で、これによって、開発者がソフトウェアを制作してスマホユーザーに販売できるようになった。Ａｎｄｒｏｉｄスマホが、ｉＰｈｏｎｅに追いつくまで数年以上の期間を要している。

これらの機器の基本ソフトウェア上で、利用するソフトウェアのパターンは、ＰＣ、スマホいずれの場合も、大別するとアプリかＷｅｂの２つのパターンがある。アプリは開発されたプログラムをインストールして使用し、Ｗｅｂはサーバー上に配置されたプログラムを、インターネットを利用してブラウザ上で使用する。ブラウザは任意のブラウザを使用できる。Google Chrome、Microsoft Edge、Firefox が三大ブラウザといわれているが、これらもアメリカ発である。Firefox はオープンソースで、Mozilla Foundation という非営利団体で運営されるが、本拠地はアメリカである。いずれにしても、ブラウザの宣伝効果は計り知れないくらい大きい。

少し専門的になるが、Windows のソフトウェア開発には、マイクロソフトの開発ツールが使われることが多い。最近では、Windows 以外のソフトウェア開発でも、編集ソフトは、マイクロソフトの Visual Studio Code が使用されることが多くなっている。また、ソース管理として利用される Git、GitHub は、やはりマイクロソフトの運営になっている。近年、システム運用のための自社サーバーを持たず、クラウドサービスを使用することが多くなっている。Amazon の AWS、マイクロソフトの Azure、Google の GCP が三大クラウドサービスと呼ばれるが、こ

の３社で７割のシェアを占めている。（総務省情報通信白書令和６年度版）

これまで述べてきたように、これらの機器や基本的なソフトウェアは、すべてアメリカ発の発想であり、技術である。昨今のＡＩブームも同様である。我々は、それらの技術を使用させてもらっている状態であり、アメリカに対価を払い続けていることになる。アメリカが、デジタル技術の主導権を握っていることは、自国の半導体、電気通信、金融などの他の産業にも好影響を与えている。アメリカ経済の好調が続く要因の一つであると思う。

日本の国際収支において、デジタル関連サービスの赤字である「デジタル赤字」は、近年急速に拡大しており、これらのサービスを提供しているアメリカをはじめとする関連する各国への支払いが膨らみ続けている。赤字の規模は、好調なインバウンド（訪日外国人旅行）の分野での黒字に匹敵するといわれている。デジタル赤字の拡大は、日本のデジタル化が着実に進んでいることであり、悪いことばかりではない。しかし、無視できるような赤字の規模ではなく、困難ではあるが、国産のデジタル関連サービスを充実させ、それらを積極的に利活用していく努力が必要でないだろうか。

日本は、アメリカがこれまでしてきたようなデジタル技術を利用したサービスの提供を短い期間で行うことはできない。むしろ、それらを細部にわたって高度利用を考えた方がよさそうだ。インターネット、スマホ、クラウドサービス、ＡＩなどのデジタル技術を調査、分析、応用し、時機を得た基盤となるサービスの開発を官民学一体となって、地道に取り組んでいく施策が求められる。行政、通信、教育、研究、医療、経営、自動車、金融、ＥＣサイトなど応用分野は広い。細部にわたる独自性の高い技術開発にも対応できるのではないかと思う。

鎌倉

１９９１年放映された大河ドラマ「太平記」で一番印象に残っているのは「鎌倉炎上」のシーンであった。そ

れは、滅亡の際に、東勝寺に集まった数多くの北条一族や一門の人々が自決したことに、ショックを感じたためだと思う。

北条高時役が片岡鶴太郎、長崎円喜役がフランキー堺という役どころであった。高時の側室役が、その当時美少女で話題になった小田あかねで、栃木県真岡出身ということをなぜか覚えている。

鎌倉時代を扱った大河ドラマは、草創期のものが多いせいもあってか、自分としては鎌倉時代の終わりごろの時代は、よく理解していなかった。最近になって、鎌倉幕府が滅亡に至った経緯について、少し興味を持つようになった。ちょうどその頃、鎌倉歴史文化交流館（以下、交流館と呼ぶ）という施設で北条氏滅亡をクローズアップした企画展が行われていることを知ったので、足を運んでみることにした。（企画展　北条１５０年　栄華の果て　―鎌倉幕府滅亡―　会期　令和六年九月二十一日～十一月三十日）

鎌倉は、修学旅行を含め、観光で何度か訪れているだけで、この地の地理や歴史について詳しく理解していない。過去に訪れた箇所も、長谷の大仏、鶴ケ岡八幡宮、小町通りくらいである。ただ、身近な友人が、鎌倉市役所に勤めていたので、ある種の親近感は感じていた。この街が歴史的に繁栄した鎌倉時代から室町時代中期頃まで、市中で、政変、反乱、粛清など多くの事件が繰り返され、血塗られた武士の都だったというイメージが強かった。

交流館は、ＪＲ鎌倉駅から北西方向へ少し坂を上った谷あいにあった。徒歩で１０分もかからないが、背景が崖に囲まれたような閑静な場所であった。もともと安達氏のゆかりの寺院である無量寿院（無量寺）があった場所ということだった。途中、住宅地の地番表示には、扇ガ谷とあったので、あの太田道灌が家宰（家長に代わって家政を取りしきる職責）を勤めていた扇谷上杉氏の邸宅があったあたりなのだと想像できた。１０時開館であったが、開館前に何人か入館を待っていた。後で分かったことだが、アニメ「逃げ上手の若君」の北条時行がブレークして以来、この交流館には目に見えて来客数が多

くなっているとのことであった。

交流館は、説明によれば、世界的に著名な建築家ノーマン・フォスター氏の設計事務所（フォスター＋パートナーズ）が手がけた個人住宅をリノベーションした博物館だ。鎌倉の歴史遺産・文化遺産を学び、体験し、交流できる場として、平成29年5月15日に開館した鎌倉市立の博物館施設である。博物館としての規模はさほど大きくないが、リノベーション前の個人住宅としては、相当大きな邸宅だったと推察できる。いずれにしても、建物の雰囲気は洗練され、シティ感覚あふれた室内になっていた。常設としては、「鎌倉の歴史の通覧」、「中世都市鎌倉と武士の営み」、「観光地化が進んだ近世から現代まで」、「中世鎌倉の都市生活出土遺物」の展示が行われていた。今回の企画展のテーマである「鎌倉幕府滅亡」に関しては、別棟に展示されていた。

当日は、企画展の館内説明（ギャラリートーク）が行われる日だったので、それを目当てに来館している人が多かった。常設展示の説明の後、別棟で今回の企画展の説明が行われた。それほど広くない展示室なので、貴重な展示物を拝見しながら、学芸員の方から間近で説明を受けた。説明された学芸員は、多分、本企画展冊子の主要著者である鈴村楓実氏（女性）だと思う。説明のなかで、次のようなことなどを強調されていた。

・鎌倉幕府は衰退期がなく、突然滅亡している。

・北条高時は田楽や闘犬にうつつを抜かし、「太平記」などで、暗君と酷評されているが、近年は再評価されている。

・覚海円成（円成尼）ら北条一族の女性は、助命され、伊豆の北条氏の邸宅に円成寺を建立し、一族の菩提を弔いながら余生を送った。

今回、鎌倉を訪れた主な目的は、この展示会を見ることだったので、他の観光地を見物することはなかった。ただ、鎌倉は観光地だからかもしれないが、道すがら、おしゃれな街だなと感じたことがいくつかあった。

横須賀線で、電車が北鎌倉駅に着いたとき、反対側の登りホームで電車を待つ老人男性がいた。その男性の服

装が上から下まで、上品で洗練されていた。いわゆるファッション雑誌から飛び出したかのような着こなしで、どこか違和感があるのだが、なぜかホームの情景に溶け込んでいた。鎌倉駅から交流館までにもちょっとした街並みがある。そのような通りには、住宅も混在しているが、カフェと呼ばれるような店も数多くある。平日の午前中というのに客が入店していることに驚かされた。また、女性グループが集まって歓談している店もあったりして、熟成した街の姿を強く感じた。

このような街の熟成度や文化度の高さは、ニュアンスや規模は違うものの、京都と共通しているのかもしれない。自分がこれまで抱いてきた鎌倉の陰湿なイメージも、少しは薄らいできた。現在（２０２５年３月）、交流館では、企画展「平泉から鎌倉へ―兵どもが夢の先―」が開催されている。平泉藤原氏（近年の研究で、奥州藤原氏は平泉藤原氏と呼ばれるようになっているとのことだ）が築き上げた浄土世界に感激した頼朝が、平泉の寺院を模して永福寺を建立していることや、平泉藤原氏の栄華、鎌倉へと伝わった平泉の文化について紹介している。昨年は平泉を訪問しているので、何かめぐり合わせのようなものを感じた。

推し活

推し活という言葉が最近使われることが多い。〇〇活という使い方は、学校の部活動を省略して部活と呼んだのが一番古そうだ。婚活、就活、終活なども古くから当たり前に使われているが、今では、妊活、転活、育活、温活、菌活、墓活、朝活、友活など数十個もあるようだ。〇〇活はすでに使い方が市民権を得ており、便利で簡単な言い回しなので、これからも、種類が増えていきそうな勢いだ。〇〇活は、何かしら活動していくことなので、ポジティブな意味で使われることが多い。その点で、好ましい言葉の使い方であるようだ。

似たような言葉の使い方で、パワハラ、セクハラ、モラハラ、マタハラ、カスハラなどの〇〇ハラという言葉

も多くなっている。精神的加害の種類とハラスメントの合成語である。暴力などの身体的な行為や暴言、無視によって、精神的なダメージや不快感を与える「いじめや嫌がらせ」であり、忌み嫌われるべき言葉である。また、アメリカンファーストや都民ファーストなど、自己中心主義的な意味での〇〇ファーストという言葉の使い方は、その中心となっている人たち以外からすれば、必ずしも好ましくは感じないだろう。

押し活も、〇〇活の一つで、最近よく使われることが多い。押し活とは、自分の好きな人物や、人物以外の対象物を、何かしらの形で応援することのようだ。もともと熱狂的なあるアイドルファンが、自分の好きなアイドルを「押し」と呼んだことが始まりという説がある。対象は多種多様である。好きなものであれば、何でも押し活の対象になる。例えば、アイドル、俳優、声優、歌手、アーティストなどの芸能関係の他、スポーツ、スポーツ選手、スポーツのチーム、アニメやアニメのキャラクター、ゲーム、歴史上の人物など、バラエティーに富んでいる。趣味そのものも押しの対象になる。

押し活は、押しの対象を応援するために、活の文字通り、何らかの活動を行うことになる。対象が、音楽アーティストであれば、ＣＤを購入したり、コンサートを見に行ったり、イベントに参加したりする。鉄道ファンであれば、列車の写真を撮りに行く。野球選手であれば、球場に出かけたり、キャラクターを購入したりする。活動の形態は様々である。多くの場合、お金を出費するが、この消費活動が経済的な活動としても重要だ。遊びの出費３項目である、移動費（交通費）、施設利用費（コンサートチケットなどを含む）、物品購入費（カメラなどのツールやお出かけ用の衣服類の購入を含む）で考えるとわかりやすい。

押し活すること自体は、年齢はあまり関係ないのだが、年齢によって、対象は変わるだろう。自分の身近な者（すべて女性）で恐縮だが、例を示す。未就学児「シナモン」、小学生「ＡＤＯ」、「ストプリ」、「呪術廻戦」、大学生「ポケモン」、アラフォー「ＧＬＡＹ」（伝説の幕張

２０万人コンサートを見に行っている)、６０代後半「サザンオールスターズ」、「矢沢永吉」、「Ｇ－ＤＲＧＯＮ」、「ＢＴＳ」（一時、テレビ画面でも車でもＢＴＳの曲ばかりだった）、７０代前半「林部智史」（林部智史については、「これを聞いてみて」と何度もＬＩＮＥのリンクで推薦があった。その都度曲を聴いたが、歌唱力が高く、ロングトーンを安定して発声できる実力のある歌手だと感じた。さらに、付き合いと思い、１か月くらいかけて林部智史の全曲を聴いて感想を送った。しかし、その後もまた別なリンクを送ってきたときは、しばし返信できなかった。自分の押しを他の人に推薦するのはいいが、過度に押し付けてくるのは自重した方がいいと思う）。

それにしても、押し活には良いことが数多くある。

・人生が豊かになる
・心身の癒しになり、健康に良い影響がある
・仲間ができ、交流が広がる
・仕事や勉強をはじめ、幅広く自分磨きになる
・日々の暮らしに張り合いがでる

押し活は、得られることが多く、人を幸せにするもののようだ。人は、何かに夢中になっていないと生きていけないのかもしれない。自分はこれまで押し活と言えるほど、極端なのめりこみはなかった。今からでも、何か夢中になれるものを考えてみようかなと思う。

推し活２（石川さゆりコンサート）

２０２５年５月２５日（土）印西市文化ホールで石川さゆりのコンサートがあった。このとき、前タイトル「押し活」の事例を目撃したので、コンサートの様子を含め、本稿で追記したい。

コンサートの２、３か月前、当ホールで開催された幼稚園の発表会に出かける機会があった。そのとき、このコンサートのポスターを見かけ、チケットを購入することにした。演歌を聴くことはあまりないが、料金も手頃だし、地元で一流歌手のライブを見ることができるので、ぜひ見にいこうと思った。このホールの客席の定員は５

００人ほどであり、一流歌手がこのような小さな会場でも公演することついては、少し意外な感じがした。

コンサートの始めに、石川さゆり本人も、やはり広くない会場については気になったらしく、客との距離が近く、会場も思ったよりコンパクトだと話していた。印西市については、東京の近郊の割に静かなところだと印象を述べていた。その日はちょうどイオン千葉ニュータウンで催涙スプレー事件が起きた次の日であったので、その事件にも関心を示していた。

コンサートに行くときは、そのコンサートがどのように構成されて展開していくとか、楽器編成について考えるのが一つの楽しみである。初めてのアーティストの場合は、とくにその期待が大きい。

コンサートの全体の流れは、彼女のトークで展開していくものであった。彼女の歌唱力からすれば、歌の連続でもエンターテインメント性が十分高いと思うが、そうではなかった。これも意外なことであるが、彼女は話し上手であり、饒舌であるといってもいいくらいだ。それと、曲の並びにできるだけ物語性を持たせていたことも、このコンサートの特徴だと思った。

アーティストも話し上手でなければ、自らのコンサートを開けないだろう。長年、一流のアーティストとして活躍するには話し上手は当たり前だと、そのときは納得した。しかし、後で考えてみると、例えば、すでに引退しているが、安室奈美恵はコンサートのとき、ほとんど喋らないらしいし、ボブ・ディランの東京公演のときのように、黙々と演奏を続けるばかりのアーティストもいるから、よくわからない。

バックの楽器編成については、彼女本人からも説明があったが、コンパクトなアコースティック編成にこだわったということだった。会場の広さに合わせているようだ。客席から見て、左から、ピアノ、ベース、管楽器、アコースティックギターの並びの４人編成であった。ベースは、サイレントベースと呼ばれるエレキのウッドベースで、音を響かせる胴体がないものだ。手引きに加えて、弓引きで演奏する場面も多くあった。管楽器担当者

は、テナーサックス、クラリネット、フルートを持ち換えて演奏していた。なお、楽器の種類等については、間違いがあるかも知れないので、ご容赦ねがいたい。「津軽海峡・冬景色」のジャジャジャジャ・ジャーンの出だしは、この編成では無理ということであった。今年の１２月成田国際文化会館で予定されるコンサートでは、フル編成なので、この出だしで演奏されるとのことだ。

楽器編成はコンパクトなアコースティック編成であったが、それぞれの演奏テクニックは抜群であり、迫力があった。そこに、彼女のお喋りと一流の歌唱力が加わり、最高のコンサートであった。

コンサートの途中から気がついたのだが、客席から、妙に上手く合いの手を入れていた人たちがいた。その方向をよく見ると、客席の後方の両端にそれぞれ数人から１０人ほどの人たちが陣取って、合いの手を入れたり、はでな声援を送ったりしていることがわかった。衿の縦文字に「石川さゆり」と書かれた黄色か青色のそろいの法被（はっぴ）を着て、ペンライトを持っているので、ファンクラブなどの人たちであると一目でわかった。

存在感は抜群であった。ファンでもコアな人たちであろう。親衛隊と呼んだ方がいいのだろうか。彼らのおかげで、コンサートの盛り上がりも一段と違ったものになっていた。それらが、彼らの真骨頂であり、押し活の究極の姿でもある。広くない会場だったので、より一層身近に感じることができた。アーティストからすれば、彼らは心強い味方である一方で、彼らにとっては、アーティストはスターであり、生きがいそのものである。アーティストとともに深い絆で結ばれているのだろう。何か一つ「押し」の対象を持っていることは幸せなことだ。羨ましく思う。

ビジネス街のつつじ（印西市大塚）